

地域医療連携室だより

地域医療支援病院 登録医療機関 642 件

2015 年 10 月



小児の高度専門医療と移行医療の充実

総長 康井 制洋

当センターは小児の専門・三次医療の担い手として、さまざまな分野において先進的な高度医療の導入に取り組んでまいりました。成人や高齢者の医療と同様に、周産期・小児期医療にも次々と技術革新がもたらされ、新たな治療法や患者負担の軽減を目指した医療技術が積極的に導入されています。希少疾患・遺伝病に対する次世代ゲノム解析による早期診断と治療、再発・難治性小児がんに対するオーダーメイド医療、患者の負担軽減を目指した低侵襲腹腔内視鏡視手術や心臓カテーテル治療、分娩仮死や感染などによる脳障害に対する脳低温療法、重症食物アレルギーに対する経口免疫寛容療法、小児リウマチ性疾患に対する分子標的薬の導入、再生医療を応用した唇顎口蓋裂に対する集学治療、将来のコスメチック効果に配慮した母斑に対するレーザー治療などなど、出生前から始まり小児医療のほとんどすべての分野で目覚ましい成果が得られています。一方、これらの進歩により小児期疾患の累積長期生存率が向上するに従って、新たに成人期への移行期医療の充実が課題となってきました。



地域で生活する成人年齢に達した患者の方々に良質で適正な医療を提供できる体制の整備が求められています。すべての患者さんが住み慣れた地域において安心して充実した日常生活を送るためには、日々の健康管理や疾病予防、こころのヘルスケアの提供など、地域密着型の総合的な医療・保健・福祉サービスの確保が望まれます。移行期医療の充実には、専門医療機関間の連携強化ばかりではなく、日常管理を担う地域の診療所や保健福祉行政機関などとの横断的で双方向型の新たな連携システムの構築が求められます。今後さらに質の高い継続医療の達成をするために、成人医療機関による後方連携の積極的な開拓や介護と福祉、行政サービスなどの社会資源の円滑な利用を促すシステム作りを目指さなければなりません。関係各方面との一層の連携強化に努めてまいります。

「乳幼児の母斑・血管腫治療」

皮膚科 馬場 直子

母斑や血管腫を持って生まれてくる子どもの割合は、昔と変わらないはずですが、こども医療センターを受診される患者さんの人数は年々増え、私が最初に赴任して来た 22 年前に比べて 8 倍以上にも昇っています。母斑や血管腫のようないわゆる皮膚のあざは誰の目にもとまり、ご家族にとっては大変気になる悩みの一つとなり得ます。まして、顔や頸、腕や脚など目立つ部位にある場合はなおさら、幼稚園や学校などの集団生活に入る前に何とか治したいと望まれるのは当然のことと言えます。そのご希望に答えるべく、皮膚科では乳幼児期の早い時期からのレーザー治療を行っています。入院の必要はなく、局所麻酔だけで行い、終わったらすぐに帰れる負担の少ない手技です。実際に多くの症例を経験してみますと、月齢が早い時期から治療を始めるほど効果が良いことが分かってきました（図 1）。新生児期からみられる母斑・血管腫でレーザー治療の適応となるものは、イチゴ状血管腫、ポートワイン母斑（図 2）、異所性蒙古斑、太田母斑などです。

1. 早期レーザー治療をするべき母斑・血管腫

1) イチゴ状血管腫

生後すぐには現れず、数日～2 週間くらいで鮮紅色の紅斑が現れ、急激に増大・隆起してきます。扁平に隆起する局面型、ドーム状に隆起する結節型、大きな腫瘤を形成する腫瘤型の 3 型に分けられます。増大のピークは、5～8 か月頃にあり、ピークを過ぎるとゆっくりと消退し始めます。

局面型では、何もしなくてもほとんど跡を残さず 6～7 歳までには自然消退しますが、結節型、腫瘤型では、血管の赤い色はやがてほぼ消えるものの、瘢痕や皺、たるみが残ります。

イチゴ状血管腫に対してレーザー治療は絶対適応ではありませんが、レーザーによって自然消退を早める効果と、生後 2～3 カ月以内に開始できれば、増大を抑制してピーク時の大きさを小さくとどめる効果が期待できます。レーザー治療をするかどうかは、部位、時期、型によって異なるので、従来のように一律に wait and see ではなく、まずは皮膚科にできるだけ早く相談していただきたいと思います。

2) ポートワイン母斑（単純性血管腫）

新生児の 1.5%程度にみられ、出生時より隆起しない境界鮮明な紅斑として、全身どこの皮膚にもみられます。

三叉神経第 1・2 枝領域にある Sturge - Weber 症候群では、眼の脈絡膜血管腫、脳軟膜にも血管腫を伴い、緑内障、てんかんを伴います。四肢に広範囲にあり患側の肥大がみられる Klippel - Treunay - Weber 症候群では、脚長差が大きくなる問題となります。

自然経過ではイチゴ状血管腫のように消退することはないばかりか、思春期になると紫がかった暗赤色に濃く変色し、さらに中年期以降はポリープ状に隆起してくることがあり早めの治療が求められます。

図1.ポートワイン母斑(249症例)におけるレーザー治療の年齢別有効率

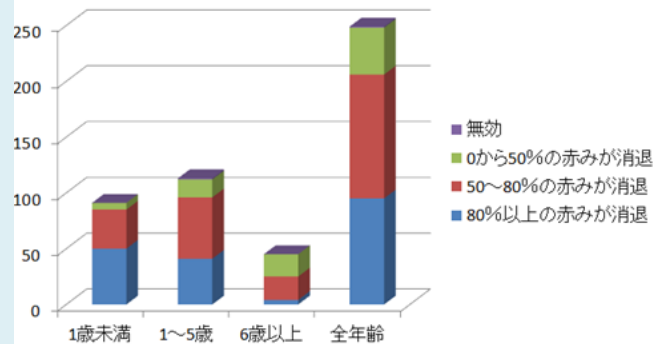


図2. 2歳女児. ポートワイン母斑.
レーザー照射前

レーザー照射3回後.
80%以上の赤みが消失した.

3) 異所性蒙古斑

日本人のほぼ 100%に、腰仙骨部の青い蒙古斑がありますが、他の部位にも異所性蒙古斑がしばしば見られます。薄いものは自然消退するので治療の必要はありませんが、メラニン色素が多くて色調が濃い場合は、生涯残ることがあります。残りそうな濃いもので目立つ部位にある場合はレーザーで行います。

4) 太田母斑

生後数ヵ月以内に現れる、眼の周りの青褐色斑で、自然消退することなくむしろ次第に濃くなります。皮膚だけでなく、眼の強膜にも斑点が現れることがあります。

2. 皮膚科におけるレーザー治療

血管腫は V ビームレーザー、色素斑はアレックスレーザーで治療を行っています。標的とする真皮の拡張血管やメラニン色素だけを選択的に破壊する波長のレーザー光線を照射し、周囲の組織の損傷は最小限に留め、瘢痕を形成しないで治療できます。特に V ビームレーザーは、照射直前に患部に冷却剤を吹き付ける疼痛緩和システムが付加され、乳幼児により優しい治療になってきています。

レーザー治療は、外来でクリームやテープを貼るだけの局所麻酔で行うことができます。

先天性の母斑や血管腫は、露出部位にあるとあざとして整容的に目立ち、目・鼻・口の周囲にある場合は機能的な問題も生じ、患児及び家族の QOL に大きくかわります。乳幼児期からの早期介入の有無が、その後の生活や人生を左右する場合もあることを御理解いただき、是非とも的確なアドバイスをお願いする次第です。

神奈川県立こども医療センターの基本理念と基本方針

1 基本理念

こどもの健康の回復及び増進と福祉の向上のため、最善の医療を提供します。

2 わたしたちのちかい

あなたの「げんき」と「えがお」のためにみんなでちからをあわせます。

3 基本方針

- (1) 患者さんの命と安全を第一に考えます。
- (2) 患者さんと家族とともに医療を行います。
- (3) 高度、先進的な医療を行うとともに、積極的に臨床研究に取り組みます。
- (4) こどもの発育、発達を考えた療養環境、教育環境を整えます。
- (5) 周産期・小児医療と保健・福祉に携わる人材育成に努めます。
- (6) 地域の関係機関と連携し、周産期・小児医療の充実、向上に貢献します。
- (7) 透明度の高い病院運営と情報公開に努めます。

神奈川県立こども医療センター・研修のご案内

第25回 心臓血管外科勉強会（予定）

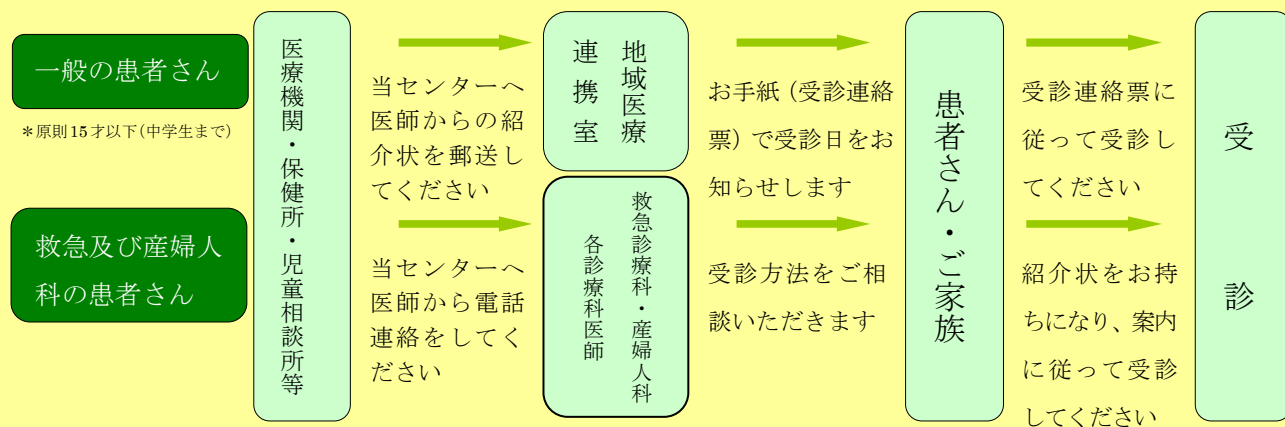
- ☆ 日時：平成27年11月13日（金）18:00～20:30
- ☆ 場所：当センター本館2階講堂
- ☆ お問合せ：地域医療連携室
- ※ 詳細はホームページに掲載予定

第41回 循環器連携カンファレンス（予定）

- ☆ 日時：平成27年12月4日（金）19:00～21:00
- ☆ 場所：当センター 本館2階講堂
- ☆ お問合せ：地域医療連携室
- ※ 詳細はホームページに掲載予定

【紹介予約受診システム】

当センターは、医療機関や保健所等の医師からご紹介いただいた患者さん原則15才以下（中学生まで）が、初診の予約をお取りになり受診していただく「紹介予約制」を取らせていただいております。予約の方法・手続きにつきましては下記をご覧ください。



※紹介状の添付資料(画像やフィルム等)も紹介状と併せて事前にお送りください。

※紹介状用紙(料金受取人払)の送付をご希望の場合は、地域医療連携室までご連絡ください

編集・発行

神奈川県立こども医療センター 地域医療連携室

〒232-8555 横浜市南区六ツ川 2-138-4 TEL 045(711)2351 FAX 045(710)1933

<http://kcmc.kanagawa-pho.jp/> ホームページのリニューアルをしました。